

が、一銭も取れなくとも、自分が貯金を奨めた方々のことを、思ったのでしようか、愚痴一つ申しませんでした。

どんなにか、申し訳無く思ったことと思います。戦争は嫌ですね。

私もいろいろ働きましたが、子供達に、十分な教育も出来ず、成績の良い子供達でしたが、可哀想なことをいたしました。

主人が病気のため、子供が大学を、途中で退いたのでした。

そのたった一人の男の子も、主人の七回忌の時に亡くなりました。

私も、娘が四人おりますが、やさしい娘達のお蔭で、軽費老人ホームに、少しばかりの国民年金と、娘からの仕送りで、暮らせていただいております。

七十九歳になるところですが、未だ生きて行かねばならないですね。

主人も、息子も、私が、(クリスチャン)になったものですから、自分から洗礼を受けてくれました。

今は安らかに教会のお墓に眠っております。人生の労苦を終えた、私の行くのを、待っていてくれることと思います。

この先、子供や孫のために、二度と戦いの無い、平和な国であって欲しいと祈ります。

母の背中に弾の破片が

北海道 遊 佐 英 子

平和で、静かな平成三年のお盆、満六十歳になった私、机の前には孫のえりかちゃんが私にだっこして、私の只でさえ細かい目がもうすっかり形がない程に満足そう、平和な今日この頃である。

私は樺太、知取の高砂町に生れ、母方の祖父母に可愛がってもらって、暮していた昔の日々が、つい、昨日のようによみがえって来ます。

戦後四十六年目と、ニュースで言っていたけれども、そんなことを数えている暇もなく、たえず何か働いて

来た終戦後の毎日でした。

小学校入学の前年に父は召集され、見送りに行った知取駅で悲しくて手の旗を落して泣き出したあの日のことは忘れもしません。

三年生の時、帰還しましたが、相生町の鈴木部隊長（ニックネーム）を先頭に、迎えに行つてよろこんだことを覚えております。

それから四年くらい、店を営む父の姿、商売も町内会もバリバリこなしているのを見て、子供ながら頼みしく思っていたものです。

昭和十八年十一月二十四日、知取一校の火災で二十三人の男子生徒が焼死しました、同じ六年生であった私は、火の中から九死に一生を得ましたが、今もその後遺症に苦しんでおります。

今思うのですが、子供なのに、あの火と煙の中で同級生に指示出来たのは、常日頃父が自分が不在でも困らぬようにと、何かと教訓していたたまものであったと考えることがあります。

私は、一番上ということをと、き込まれ、泣いてな

んかいられなかったのです。

四十歳をすぎている父は、現地召集になりましたが、終戦となっても帰りません。私達母子七人は叔母の助けで、無蓋車に詰め込まれ、知取を逃れ出しました。途中の海岸に馬や家畜など、放棄されたままで、むごかったものです。

落合の町も空襲されていて、いやな予感がすると、親達は話し合っておりましてところ、おろされた豊原の駅前での大空襲、ヒューン、ヒューンと飛んで来る弾に、「この弾で死ぬ」「この弾に当る」と身をひねって伏せました。

一旦、飛行機が引揚げたので、とにかく、山へ向かつて逃げたのです。ハシカで高熱の三番目の弟の手を固くつかんで、「早く、早く」と日暮れまで歩き通しました。

ふと見ると、母の背中に弾の破片が斜めに飛び抜けたあとがあり、命びろいをしたものです。

十月出産の体でしたから、もし、母が万が一の時は弟妹揃って帰れたか……と思うとき、中国孤児の方々

のことが人ごとではないと今にして涙ながらに思うのです。

数日、豊原市役所の書類倉庫の中で地べた生活、足の裏まではれあがった軍人さんが、民間人の中に割り込んで来たり、建物のまわりは、排泄物でうっかり歩けません。それは此の世のものではありませんでした。

数日経って、駅前へ荷物を取りに行ったとき、爆撃で死んだ人の腕や、病院の地下室に山のように、死亡者の積んであるひどさを見ました。

ソ連の命令で、荒れた知取へ戻されました。奥地から逃げて来た人達が、私のうちの店や住宅に住み込んでいたため、空けて貰うまで小林宅で待ちました。

父は生死不明、不安な毎日と生活苦。

母は昭和二十年九月十九日、女兒出産。末の妹、悦子の誕生です。

今、母の気持を思うとき、どんなにか陰で涙を流しただろうと思います。家業はダメ、父はいない、子供七人と母一人、無用心このうえなし、夕暮れともなるど、少しの灯りも洩れぬよう、五寸釘を打って遮光幕

をおろし、息をひそめて朝を待つ毎日でした。安達さんが同居されてからは、ホットしたものです。

私は川北の事務所に勤め始めましたが、二か月くらいで、母子家庭優先で昭和二十二年三月二十二日引揚命令が出て、持って帰られぬ物は全部、役所の人が員数だけ書いて、涙で見送りました。

父母の血と汗の結晶の家も土地も、何もかもすべてを、今でいう私有財産です。

昭和二十二年四月四日、知取を後に、気が向かないと走らない汽車、豊原の町はずれでかなり止められ、やっと真岡の収容所へ、坂の上の収容所生活は、便所で泣かされ、ひどいものでした。小さい子を連れて命がけ、深く掘った便所で落ちたら大変でした。

日本人の投げた荷物（あきらめた荷物）が大きな山を作っておりました。ぬかるみと思っただら下はフトンの綿でした。

あわただしく、恐ろしい感さえた税関検査と、牛にするような注射を背中に入ったれ、おしるこのような泥んこ道を歩いて、波止場へ。

一枚の板を登り、昭和二十二年四月七日、長運丸の人となった。

昭和二十二年四月十五日無事函館に上陸、DDTでみんな真白、電車で初めて乗った子供達、その晩はお寺に泊った。

日本海沿いに、桜が満開の二子塚の北川家に世話になる、内地の生活に馴れず、とまどいばかりの半年でした。

早朝から夜遅くなるまで働きに出ていた私には只頑張るぞ、の一念しかありませんでした。母と一緒に涙を流してはおれません。

秋ともなり母の姉を頼って北海道へと渡り炭碓も住宅難で叔母の家も大変でした。でも良くして下さったと思います。

その頃父の生存が分かり、北樺太のオハで元気でいるとのこと、青十字のハガキを交換、全部カタカナで書いてあり、何枚か今でも保存してあります。

父が元氣という希望をもって、妹と私と働き、母も末の妹を連れて学校の給食の仕事でススで真黒になっ

て帰ることもありました。

妹の会社から社宅が借りられ、親子だけでの生活ができるよろこびが増えました。

熊のおそろしさも、何んのその人より早く歩き、ガムシヤラにくぐり抜けた戦後の生活でした。

待ちに待った父が二十四年十一月四日帰ると電報が入り嬉しくて飛び上って皆んな喜び、戦後生れた妹を背に、母と弟が長万部まで出迎え、雨雪でグシヤくの道路を、普通りのあの歩調で父は帰って来ました。

その夜、私を先頭に横一列に七人の子供を並べ、母は「はい、父さん、全員無事に渡しますよ」と言いました。

三十六歳にして店を、子供を、戦中、戦後の父のいない生活の苦勞を背負って来た母、偉大です。又叔父叔母の協力も絶大なものがありました。

子供は子供なりに苦勞して暮して来ました。戦争は絶対起してはなりません。

昭和四十五年八月二十六日父は肺ガンに倒れ、六十歳で亡くなりました。敗戦抑留で体をいためたと思

いますと残念でなりません。

父に先立たれた母は、父の十三回忌をつとめ、同じ病に倒れ、私の姑の看護に十年、疲れた私に「今度は私を頼むよ」と……病はドンドン進行、ガンでない可悲しいウソを言わなければならなかった私に、二度と病名を聞きませんでした。

「子供として、してやれるのはこれまでですよ。何時も言っていた通り、三途の川まではついて行けないのだからね。この先は父さんが道案内をしてくれるから……」

きつちり目をあけて聞いていた母は、「あ、水かい」と僅かな水をゴックリと呑んで静かに目を閉じました。

母と私の戦中戦後と人生に幕が下りたのです。

魚雷を受けた第二新興丸で生還

宮城県 佐々木 嘉代子

終戦の年私は十歳でした。終戦の詔勅を正座して聞き、母が涙し、父がじつと天井をみつめる姿で戦争の終結を知った気がします。その後、「母がソ連兵が攻めてくる前に、娘たちと岸壁から身を投じます、それを見とどけてから後を追って下さい。」と父に話しているのを耳にして、戦争とは死ぬのが当然と、小さいながらも死を覚悟したものです。

でもその直後、女、子供だけの即時引揚命令が出て、着のみ着のまま、父を残し、樺太の敷香を後にしました。貨物列車に乗り込みました。真夏の太陽と夜露で辛かったのを覚えています。

やっと大泊に着き、引揚船を待ちましたが、ホームは人で溢れ、野宿して待たねばなりませんでした。私達の番がきて、第二新興丸に乗り込むことができました